

B&G財団の実践

大学との連携



事業部事業課

斎藤 大

ブルーシー・アンド・グリーンランド(B&G)財団は、新たな取り組みとして、太正大学と協定を締結し、正課授業である「フィールドワーク実習(2単位)」を受託した。これは、児童教育に関わる仕事を希望している、人間学部人間環境学科の学生を対象に、子どもたちの成長に欠かせない自然体験活動を学び、実習で得た経験や知識を将来に生かすことなどを趣旨として、昨年度から実施している取り組みである。

社会人として通用する力を

実習内容としては、まず同大学キャンパスで3日間、心肺蘇生法や自動体外式除細動器(AED)講習、ロープワーク、集団行動の研修を実施。その後、宮城県南三陸町の志津川湾で水泳、カヌー、スタンドアップパドルボート、水難救助演習などの実技研修を3泊4日で行い、B&G財団の指導者資格の一つである

「アクアリーダー」を取得するというものである。特に、キャンパス内で研修する集団行動は、ほとんどの学生が未経験ということもあり、戸惑う学生も多くいた。気を付け、休めなどの基本姿勢、号令や行進、方向転換など、最初は全員がそろわずうまくできなかったが、相互に協力し合

い、各自が役割を果たすことで、安全かつ効率的に実習することができるということを理解させながら指導を行い、実技研修の前までには迅速に行動できるようになった。南三陸町の合宿では、「整列」「点呼」「班別行動」「5分前行動」など、さまざまなルールの中でハードな日課をこなした。実技研修では、ペッ

トボトルやレスキューチューブ、スローインググローブを使用して、2人1組で救助者と要救助者を体験する救助演習を実施。水泳では落水時の対処法である「背浮き」、基本となるクロールの泳法指導、カヌーではこぎ方の基本テクニックであるフォワードストロークとリバースストローク、艇の向きを変えるスweepストロークを指導し、繰り返し練習を行った。今回の実習について、

担当教授は「これから就職を控える学生に対して、集団生活を通して協調性を養うとともに精神面を鍛えることは、社会人として通用する力を身につけるという意味において、とても重要である」と、その意義を評価する。

最終日の発表会では、学生たちから「つらい実

習だったが、多くの知識と技術を獲得できて満足している」「実習を通して仲間意識が強くなった」「この実習での学びを子どもに教え、子どもから親へ、親から地域の人た



背浮きを練習する学生たち

ちへ広げて事故による死傷者を減らしたい」などの意見が出された。

今の若者は「さとり世代」といわれ、欲がなく、休日には自宅で過ごしていることが多く、気の合わない人とは付き合わない傾向があるともいわれているが、眠い目をこすりながらも毎朝点呼、ランニングを行い、必死に実習に取り組む学生の姿を目の当たりにして、彼らのパワーを強く感じた。

B&G財団では、海洋性レクリエーションを通じた自然体験活動推進のため、学生ボランティアの育成にも取り組んでおり、今後はこのような大学と連携した人材育成に積極的に取り組んでいきたい。

本欄は月1回掲載します。